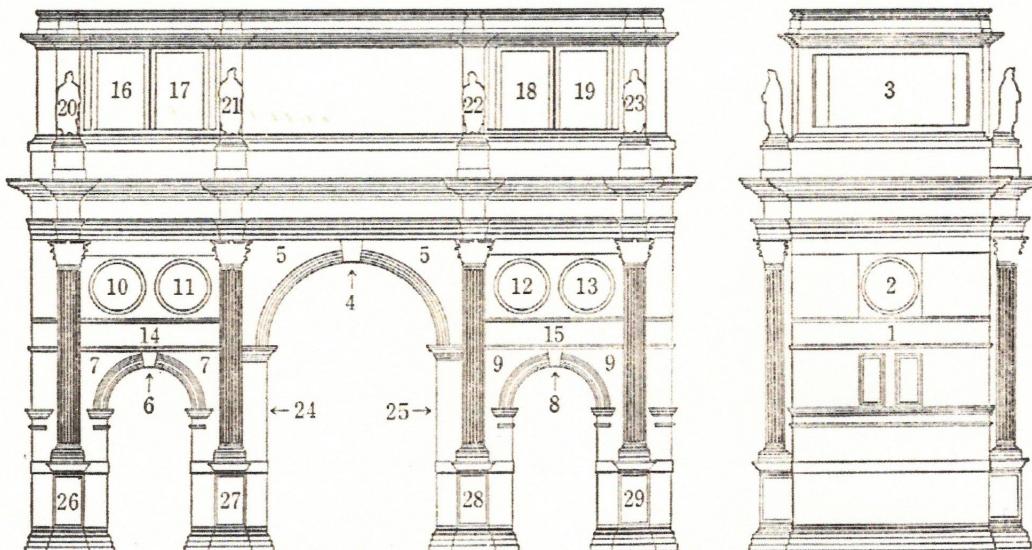


## 戦勝顕彰碑としてのコンスタンティヌスのアーチ門

豊田浩志

## I コンスタンティヌスのアーチ門の同時代製作物について

- 1) 大方の内容は青柳氏（1990年）が紹介済みであるが、ここではそこでなぜか触れられていない東西脇通路内の彫像と、詳細な検討が省かれている円柱台座 pedestal 部分レリーフも射程に入れ、とりわけ神像・軍旗類を中心に検討する。



挿図201 コンスタンティヌス凱旋門、浮彫の位置

- 2) 横長レリーフ（東西1, 南北14,15 の、計6面）



西 1 : Trier 出陣 (Profectio)



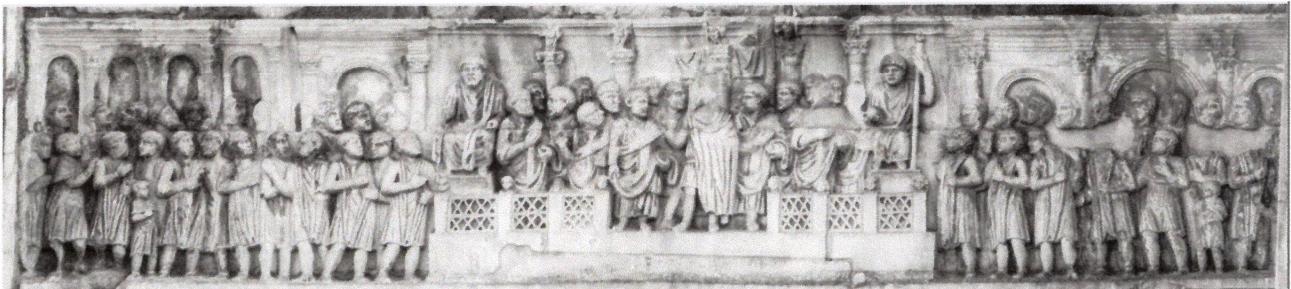
南 14 : Verona 包攻戦 (Obsidio)



南 15 : Milvius 橋の戦闘 (Proelium)



東 1 : ローマ入城 (Adventus)



北 14 : 演説 (Adlocutio)



北 15 : 祝儀分配 (Liberalitas)

3) 誰がこの内戦で顕彰されているか：南 15 にみる

- a 宮廷警護補助連隊所属 Cornuti (ゲルマン人皇帝警護隊)
- b (ゲルマン人同盟部族?) 軽装騎兵連隊
- c ムーア人弓兵部隊



Victoria

a

a

b



a



b

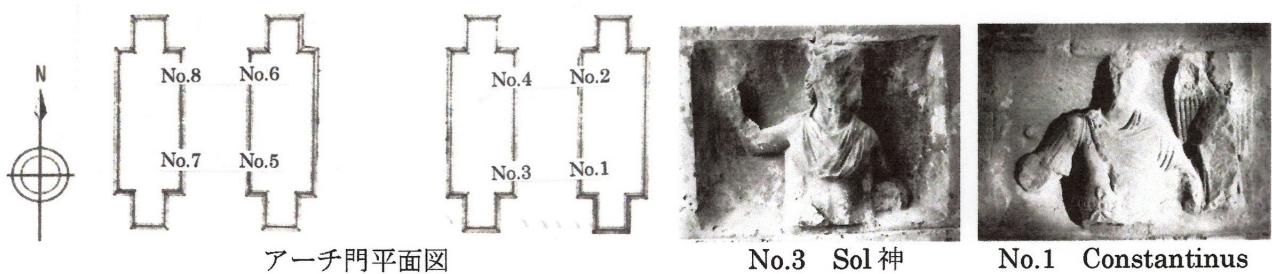
c

c



c

4) 東西脇通路の彫像 (L'Orange, 1939, pp.137-144 に依拠)



東側 (No.2,4 は欠損) : 国家制度的側面

No.1 甲冑姿の Constantinus (ウィクトリア女神から花冠を捧受)

No.3 彼の守護神 Sol 神 (放射冠を被り、右手を挙げている)

No.2 当時の同盟皇帝 Licinius か No.4 が彼の守護神 Jupiter か

西側 (いずれも著しく欠損) : 王朝的側面からの想定

No.5 Maximianus Herculeus No.6 Constantinus

No.7 Constantius Chlorus No.8 Claudius Gothicus

5) 円柱台座のレリーフ

南面・北面に各 3 面 × 4 柱 = 24 面 (現存では南面 29 左欠損で、23 面)

うち、正面レリーフはいずれも女神ウィクトリア、左右側面レリーフには捕虜、ローマ歩兵、トロパイオンが描かれている (ほぼ、東西で [南北でもやや] 対照的配置)。とりわけ中央通路の内向きのレリーフには、南面(27,28)で軍旗捧持ローマ兵 2 名、北面(27,28)で神像捧持ローマ兵 2 名が刻まれていて注目に値する。



南 28 : 聖旗捧持ローマ兵



北 28 : 神像捧持ローマ兵 : Victoria 女神と Sol 神

6) 他の神像・軍旗一覧



西 1 右端 : Victoria 女神と Sol 神



東 1 左端 : vexillum 旗 1 旒



東 1 中央 : doracon 旗 2 旒



北 14 中央：演壇 rostra 円柱上の Jupiter と第 1 テトラルキア諸帝像と、皇帝（削除）背後の vexillum2 旗



東 2 : Sol 神と 4 頭立戦車

西 2 : Luna 女神と 2 頭立馬車

(他に、5, 7, 9 に河神が登場するが、省略)

### 【注目点】

以下のエウセビオス叙述(a)とは異なって、コンスタンティヌスがらみの軍旗・神像類に、キリスト教的なものをまったく見いだせない。

II エウセビオス叙述 (『コンスタンティヌスの生涯』 I.37-43 ≒ 『教会史』 IX.9.1-11) における「アーチ門」関連叙述：合致点の確認 (b ≒ 屋階の碑銘, c,d,e,g,h,i : f は保留)

#### 7) 西面レリーフ (トリアー出陣 Profectio) : 37.1

コンスタンティヌスは、この間、これらのことすべてに憐れみを覚え、この暴虐にたいし、さまざまな準備を重ねて武装されました。もちろん彼は、万物の上におられる神をご自分の庇護者とし、キリストを救済者にして助け手をして呼び求められました。そして、a) 真に救いのしるしである勝利のトロパイオンをご自分の兵士や近衛兵の前に置くと、b) ローマ人のために先祖から伝えられた自由を守ろうと、全軍を率いられたのです。

#### 8) 南面西レリーフ (Verona 包囲戦 Obsidio) : 37.2

一方、マクセンティウスは…数え切れぬほど多数の兵士や軍団兵の無数の群れによって、自分が隸属させていたあらゆる場所や、地方、都市などを守ろうとしました。しかし皇帝コンスタンティヌスは、神からの助けにしっかりと寄り頼んで、この暴君の a) 第一、第二、第三の拠点を攻撃されました。そして、その全てを最初の一撃で易々と陥落させると、イタリアの地の大部分に軍を進められたのです。

#### 9) 南面東レリーフ (Pons Mulvium の戦闘 Proelium) : 38.1-4

コンスタンティヌスはついにローマに迫る所までやって来ました。しかし、そのとき神が自身は、皇帝がこの暴君のためにローマ人との戦いを強いられることがないよう、鎖によってであるかのように、この暴君を城門から遠く離れた所に引きずり出されたのです。そして、はるか昔に不信仰な者への [警告として] 聖なる文書に記されたこれらのことは、…すべての者によって信じられたのです。その奇蹟を目の当たりにしたからです。(以下、「出エジプト記」からの引用で、エジプトのファラオの運命がマクセンティウスの予見だったという見地から述べられる)。… それと同じように、マクセンティウスや、彼の兵士や近衛兵も「石

のように〔水〕底に沈んで行ったのです。… それらの小舟は彼らもろとも一瞬にして川底に消えました。まずその惨めな男自身が、次には彼の警護兵と近衛兵が、聖なる託宣の予告どおり、<sup>a)</sup>水嵩の増した河に、「鉛のよう<sup>b)</sup>に沈んで行った」のです。

10) 東面レリーフ（ローマ入城式 Adventus）：39.1-2

コンスタンティヌスはこれらのことやそれに近いことを、万物の支配者でそのときの勝利の立役者である神に向かって、あの偉大なしもベモーセのように、行為そのものでうたわれました。彼は、勝利の歌をうたいながら、<sup>a)</sup>帝都に入城されたのです。[すると] すぐに、<sup>a)</sup>全元老院議員や、そこにいた他の元老院身分や騎士身分は、あたかも獄舎から解放されたかのように、ローマの全市民とともに、目を輝かせ、歓声と狂気で彼を出迎えました。男たちは、妻子やおびただしい数の奴隸と一緒にになって、抑えることなどできぬ大声を上げて「解放者！」とか、「救済者！」「恩恵者！」と叫びつづけました。

【コンスタンティヌスのアーチ門と巨像に関する叙述】40-41.1

11) 北面東レリーフ（ローマ広場演説台での演説 Adlocutio に該当か？）：41.2

元老院や全市民をも含めて、都に住んでいる者はみな、苛酷な暴虐な圧政から「解放されて」息を吹き返したかのように、<sup>a)</sup>より純粹な陽光を享受し、みずみずしい新しい生の誕生に与っているように見えました。太陽が没する大洋に国境が接している民族はすべて、…<sup>b)</sup>祭典を楽しみました。そして彼らはみな、異口同音に、神の恵みから、共通の善であるコンスタンティヌスが夜明けをもたらされたと人類に告げたのです。

【マクセンティウス圧政の犠牲者の解放令発布】41.3

【キリスト教聖職者の厚遇】42

12) 北面西レリーフ（313年正月の祝儀分配 Liberalitas?）：43.1-2

1.コンスタンティヌスは、貧しい者にはあらゆる種類の生活必需品を配られました。またそれとは別に、ご自分のもとにやって来る外の者にたいしては、<sup>a)</sup>人道的で恩恵をほどこす者として振る舞いました。…  
2.不幸にも孤児になった者には…、寡婦となった女性がいれば…

13) 東面上部トンド・レリーフ（太陽神の強調）：43.3

<sup>a)</sup>太陽は地平線上に昇り、その光の輝きをすべてのものに惜しみなく与らせますが、コンスタンティヌスもそれを同じで、彼はあたかも天の光源体とともに昇っていくかのように、宮廷から、昇る太陽と共に輝き、彼の面前にやって来る者すべてをご自分の寛大な善意の光線で明るく照らし出されたのです。

【小結】

このアーチ門において、誰が戦勝の功労者として顕彰されているかというと、どうやらローマ正規軍ではなく、ガリア・ゲルマン系のコルヌーティ、それにおそらくゲンマン系軽装騎兵、さらには北アフリカ系弓兵だった、という意外な事実に行き当たる。

また、神像として突出しているのは、勝利の女神 Victoria を別にすると、明らかに太陽神 Helios-Sol である。彼の軍事力の基盤がガリア・ゲルマニアにあったことを想起すれば、ケルト系の著名な太陽神 Apollo-Grannus を彼が統治開始以来自らの公式信仰に採用していた（せざるをえなかつた）理由、それを当時のキリスト教指導者がイエス・キリストと重ね合わせようと、さまざま贅言を尽くして後付け的に忖度していた、という図式の検討が今後当面の研究課題となる。

【史料】

- 01) Hrsg. von Eduard Schwartz u. Theodor Mommsen, Zweite, unveränderte Auflage von Friedhelm Winkelmann, *Kirchengeschichte*, in: GCS, *Eusebius Werke*, II/2, Akademie-Verlag, 1907/1999 (秦剛平訳, エウセビオス『教会史』2巻, 講談社学術文庫, 2010 (初訳, 3巻, 山本書店, 1986-88)) .
- 02) von Friedhelm Winkelmann, *Über des Kaisers Konstantin*, in: GCS, *Eusebius Werke*, I/1, Akademie-Verlag, 1975 (秦剛平訳, エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』西洋古典叢書, 京都大学学術出版会, 2004) .
- 03) Introduction, texte critique et traduction de J.Moreau, *Lactance. De La mort des Persécuteurs*, 2 toms., in: *Sources Chrétiniennes* 39, Paris, 1954/2006.
- 04) Introduction, Translation, and Historical Commentary by C.E.V.Nixon, Barbara Saylor Rodgers with the Latin Text of R.A.B.Mynors, *In Praise of Later Roman Emperors. The Panegyrici Latini*, U. of California Press, 1994.

## 【文献】

- 05) Otto Seeck, *Notitia Dignitatum accedunt Notitia Urbis Constantinopolitanae et Laterculi Prouinciarum*, Weidmannos, 1875.
- 06) Alfredo Monaci, La Battaglia ad "Saxa Rubra" e il bassorilievo costantiniano, *Lettura tenuta alla Pontifica Accademia Romana di Archeologia*, 1901, pp.107-134.
- 07) Hans Peter L'Orange u. Armin von Gerkan, *Der Spätantike Bildschmuck des Konstantins-bogens*, Text/Tafeln, in: *Studien zur Spätantiken Kunstgeschichte*, Bd.10, 1939/1978.
- 08) Bernard Berenson, *The Arch of Constantine. The Decline of Form*, Chapman & Hall, 1954.
- 09) a cura di Antonio Giuliano, *Arco di Costantino*, Istituto Editoriale Domus, 1955.
- 10) Andrew Alföldi & Marvin C.Ross, Cornuti. A Teutonic Contingent in the Service of Constantine the Great and Its Decision Role in the Battle at the Milvian Bridge, *Dumbarton Oaks Papers*, 13, 1959, pp.171-183+19 plates.
- 11) M.P.Speidel, Maxentius and His Equites Singulares in the Battle at the Milvian Bridge, *Classical Antiquity*, 5, 1986, p.253-262=idem, *Roman Army Studies*, Franz Steiner Verlag, 1992, vol.2, pp.279-289.
- 12) Clementina Panella, Patrizio Pensabene, Piero Pruneti, L'arco della Discordia. L'arco di Costantino è ... di Costantino: lo affermano due archeology che confutano l'ipotesi di un monumento costruito da Adriano due secoli prima, *Archeologia Viva*, Anno XV-N.55, 1996, 36-42.
- 13) cura di Patrizio Pensabene e Clementina Panella, *Arco di Costantino tra archeologia e archeometria*, L'Erma, 1999.
- 14) M.P.Speidel, *Ancient Germanic Warriors. Warrior Styles from Trajan's Column to Icelandic Sagas*, Routledge, 2004, pp.47-50.
- 15) R.Ross Holloway, *Constantine and Rome*, Yale UP, 2004.
- 16) Christopher Walter, *The Iconography of Constantine the Great. Emperor and Saint with Associated Studies, 332 Illustrations*, Alexandros Press, 2006.
- 17) Marianne Bergmann, Konstantin und der Sonnengott. Die Aussagen der Bildzeugnisse, hrsg. von A.Demandt, J.Engemann, *Konstantin der Grosse. Geschichte-Archäologie-Rezeption*, Rheinisches Landesmuseum Trier, 2006, pp.143-161.
- 18) Josef Engemann, Der Konstantinsbogen, hrsg.von A.Demandt, J.Engemann, *Konstantin der Grosse-Imperator Caesar Flavius Constantinus*, WBG, 2007, pp.85-89.
- 19) Giuseppe Cascarino e Carlo Sansilvestri, *L'Esercito romano. armamento e organizzazione*, vol.III, il Cerchio, 2009.
- 20) Raymond Van Dam, *Remembering Constantine at the Milvian Bridge*, Cambridge UP, 2011.
- 21) Jonathan Bardill, *Constantine. Divine Emperor of the Christian Golden Age*, Cambridge UP, 2012.
- 22) Paul Zanker, Der Konstantinsbogen als Monument des Senates, *Acta ad Archaeogiam et Artivm Historiam Pertinentia*, 25(N.S.11), 2012, pp.77-105.
- 23) Paul Zanker, I Rilievi costantiniani dell'arco di Costantino a Roma, in: Mostra a cura di Paolo Biscottini e Gemma Sena Chiesa, *Costantino 313d.C.*, Electa, 2012, pp.48-55.
- 24) Marco Lucchetti e Luca S.Cristini, *L'Esercito Romano da Romolo a re Artù*, vol.3: *da Caracalla a Re Artù*, Soldiershop Publishing, 2012.
- 25) Ramiro Donciu, *L'Empereur Maxence*, Edipuglia, 2012.
- 26) Alessandra Bravi, L'arco di Costantino. Un monumento dell'arte romana di rappresentanza, in: *Enciclopedia Costantiniana*, vol.1, Treccani, 2013, pp.543-556.
- 27) Iain Ferris, *The Arch of Constantine. Inspired by the Divine*, Amberley, 2013.
- 28) Ilkka Syvänen, *A Military History of Late Rome 284 to 361*, Pen & Sword, 2015.
- 29) Ross Cowan, Illustrated by Seán Ó Bróigáin, *Milvian Bridge AD312. Constantine's Battle for Empire and Faith*, Osprey Publishing, 2016.
- 30) R.ビアンキ=バンディネルリ（吉村忠典訳）『古代末期の美術』新潮社, 1974 (Ranuccio Bianchi Bandinelli, *Rome. La Fin de l'Art Antique*, Editions Gallimard, 1970) .
- 31) 青柳正規『古代都市ローマ』中央公論美術出版, 1990, pp. 195-215.
- 32) 渡辺道治『古代ローマの記念門』中央公論美術出版, 1997.
- 33) フェデリコ・ゼーリ (大橋喜之訳) 『ローマの遺産<コンスタンティヌス凱旋門>を読む』八坂書房, 2010 (Frederico Zeri, *L'arco di Costantino. divagazioni sull'antico*, Skira editore, 2004).
- 34) ポール・ヴェーヌ (西永良成・渡名喜庸哲訳) 『「私たちの世界」がキリスト教になったとき：コンスタンティヌスという男』岩波書店, 2010 (Paul Veyne, *Quand notre monde est devenu chrétien*, Albin Michel, 2007) .
- 35) 豊田「歴史研究は刷り込みとの闘い：後 315 年ティキヌム造幣所打刻「記念」銀貨をめぐって」上智大学文学部史学科編『歴史家の窓辺』上智大学出版, 2013, pp. 203-220.
- 36) 坂田道生「《ハドリアヌスの円形浮彫り群》の図像解釈について：犠牲式と狩猟の図像伝統に照らして」『美術史』第 176 冊, 2014, pp. 256-271.
- 37) 豊田「記念建造物の読み方：コンスタンティヌス帝の二大建造物をめぐって」豊田編著『モノとヒトの新史料学』勉誠出版, 2016, pp. 72-92.
- 38) 芳賀京子「第 5 章 帝国美術の拡大と変容」芳賀京子・芳賀満編著『西洋美術の歴史 1 古代』中央公論新社, 2017, pp. 481-485.
- 39) 豊田「312 年のコンスタンティヌス軍」『軍事史学』54-2, 2018/9 発行予定。